日本外交インタビュー・プロジェクトをめぐって

Interview Project on Japan's Foreign Policy

宮城　大蔵　グローバル・イシューズ客員研究員
MIYAGI Taizo　Adjunct Research Fellow, Global Issues

〈プロフィール〉
1992 年　　立教大学法学部卒業
1992 年ー 96 年　ＮＨＫ記者
2001 年　　一橋大学大学院博士課程修了
2001 年ー　　（財）日本国際問題研究所客員研究員
現　在　　立教大学法学部助手
〈専攻〉
国際政治史
〈著作物〉
『バンドン会議と日本のアジア復帰　－アメリカとアジアの狭間で』（草思社、2001 年）
「インドネシア賠償をめぐる国際政治」『一橋論叢』第 125 巻第 1 号（2001 年 1 月）
「ふたつのアジア・アフリカ会議と日本・中国」『中国 21』Vol. 14(2002 年 10 月)ほか

「日本外交インタビュー・プロジェクト」は、2001 年 11 月に『国際問題』が創刊 500 号を迎えたのを機に開始された。戦後日本外交の重要な節目に足跡を残した当事者にインタビューを行い、主要部分を『国際問題』誌上に掲載するとともに、記録を保存することを目的にしている。

これまでに宮澤喜一、中曽根康弘、橋本龍太郎の各元総理、特使として多くの場面で外交に携わった瀬島龍三氏、元駐米大使の松永信雄氏に、五百旗頭真、北岡伸一両主査がインタビューを行ってきた。事前に質問事項の下準備をして、主査とともにインタビューに行き、その主要部分を『国際問題』掲載用に編集するというのが、このプロジェクトでの私の主な仕事である。

われわれが過去の外交の実像を明らかにし、それを現在、そしてこれからの糧にしようと試みるとき、どのような手段があるだろうか。

一般的にもっとも重要だと考えられるのは、当該時期に作成された政府の内部文書であろう。そこにはその時々の外交当事者が、進行しつつある事態をどのように認識し、どのような決定を行ったのかが、ありのままに書きとめられている。このような文書は、時を経ても客観的でありつづける、いわば歴史の証人である。日本を含めた多くの国で、25 年や 30 年など、一定期間が経過した後に、このような内部文書を公開する制度が施行されている。

このような性質を持つ文書資料に比べると、インタビューという手法には、対象者によってはどうしても時間の経過に伴う記憶の風化や不確かさが付きまとうと一般的に考えられがちである。

にもかかわらず、インタビューによって歴史を再構成する作業には、解禁された内部文書では代替できないきわめて重要な意味と役割があることを、私はこのプロジェクトを通してしばしば痛感させられている。

強く印象に残っていることのひとつが第 1 回の宮澤喜一元総理へのインタビューである。戦後初期の占領期から政権の中枢にいた宮澤氏は、いくつかの著作を著しているが、なかでも吉田茂政権時代に、池田勇人蔵相秘書官として関わった、サンフランシスコ講和や戦後日本の再軍備をめぐるアメリカとの交渉を詳細に書き記した『東京－ワシントンの密談』(中公文庫、1998 年。初版は実業之日本社、1956 年)は、戦後史研究でもたびたび引用される代表的なものであろう。

事前に質問事項を作成するに際して、改めて読み返してみたが、吉田退陣に伴って宮澤氏が蔵相秘書を退いたのは 1954 年の年末である。それから 1 年あまりで講和や再軍備に関する対米交渉の内幕を詳らかにしたこの本は、タイトルに「密談」とあるように、刊行当時としては非常に生々しい性格を持っていたであろう。宮澤氏はなぜ、どのような意図で、あれほど早々とこの本を書いたのかというのが、私の素朴な疑問であった。

果たして宮澤氏のお答えは、あれは回顧録のつ

もりで書いたというものであった。宮澤氏は戦後ほぼ一貫して戦後政治の当事者であり、総理候補といわれつづけてきた。総理の座についたのは1991年である。1956年に回顧録とはどういうことなのだろうか。

宮澤氏のお話しはこうであった。講和・独立とともに占領期に公職追放されていた鳩山一郎、岸信介といった戦前からの政治家たちが復帰してくると、政治の流れは吉田から鳩山へと移行していった。吉田退陣後、戦前派の鳩山・岸らを中心に「55年体制」が形成されることになるが、宮澤氏は「(鳩山らは)きわめて明確に戦前に遡りますから、それは明らかに違う人たちが戻ってきた」と考え、「(55年体制といった)そんなことは俺の知ったことではない」「どう考えても、吉田なり池田なりという人と戦後の時代に働いて、そして自分の仕事はそれで終わったという感じでした」とのことであった。

なるほど現在のわれわれは、鳩山、岸とつづいた戦前派の流れは60年安保での岸退陣を機に、池田、佐藤という吉田直系の政治家へと転換したことを知っている。だが、それは決して歴史の必然だったわけではない。今日でこそ「吉田ドクトリン」という言葉もあるように、吉田とそれに連なる人々が戦後日本の中軸を築いたと認識されることが多いが、1956年という時点では、鳩山らの流れが戦後日本の中心を担い、吉田や池田らは、占領期という一時期に対米交渉に尽力して講和を成し遂げた人々としてのみ記憶されるという道筋の方が、現実的だと感じられたとしてもおかしくはない。

このような当事者の認識やその背後にある世界観といったものは、解禁される公文書からはなかなか窺えない。インタビューの重要な利点であろう。

歴史を見るとき、われわれはその後の展開や結末を知っているだけに、どうしても年表をなぞるようにさまざまな出来事が単線的、必然的に展開したと捉えがちである。だが歴史は、その時々にさまざまな人々が事態に挑み、格闘した所産なのであり、人間の日々の営みの集積なのである。

インタビューという手法は、現代史、そしていま現在の日々の政治や外交が、何よりも人間の苦悩と決断によって成り立っていることを浮き彫りにする。政府や行政は組織や機構で成り立っているが、動かしているのは人間なのであり、それは国際政治とて同じことであろう。このプロジェクトでは、総理や外相、外交官、そして政府外にありながら重要な役割を果たした人々と、外交に携わったさまざまな人々へのインタビューを重ねていく予定である。やがて人間の営為としての外交の姿が浮かび上がってくるのではないだろうか。

日本外交の実像を明らかにする手段のうち、「書かれた記録」である政府文書の公開は、先日情報公開法が施行され、占領下の天皇・マッカーサー会談や国交回復に向けた70年代の日中交渉の記録など、これまで公開の見込みはないと考えられていた文書も次々に公開されるなど、従来に比べてはるかに改善された。

だが、もう一方の「語られる記録」であるインタビューによる記録は、政策研究大学院大学などで大がかりなプロジェクトが進められているとはいえ、依然、幅広く根づいているとは言えない。

このような話になると、アメリカではここまで進んでいるのに、となるのがお決まりである。私も外交史研究者の端くれなのだが、確かに日本の外交政策を調べるのに基礎的史料として使うのはアメリカの記録や証言ということが少なくない。だがこの話は、どうも外交史研究者にとっての便利／不便というだけでは済まないように思われる。

アメリカ側の記録や証言でなるほど、日本側の発言の概要は把握することができる。だが、日本側の発言や態度の背後にある認識、意図についても記録に残るアメリカ側の分析に頼らざるを得ないことがしばしばある。しかし、アメリカ側の記録や証言はあくまでもアメリカの外交当局や外交官によるものであって、あたりまえだがそこには、アメリカ側の視角や関心が反映している。

戦後日本外交が、ややもすると受け身で戦略不在などと評される一因は、日本側の意図や戦略を日本の主観から跡付けるための文書や証言が非常に限られてきたことにもあるのではなかろうか。

日本外交の当事者の多くと密接な関係をもつＪＩＩＡが、本プロジェクトのような企画を主導することには、実に深い意義があるように思うのである。